



須田善明

女川町長

特別対談



東日本大震災で町の7割を喪失した宮城県女川町。もともと困難な時期に、あえて宮城県県議会議員から転身し、女川の新生にむかって陣頭指揮を執る須田町長。女川の、被災地の、現状から将来のまちづくりまでを、須田町長と石田編集長が語り合いました。

子どもたちが引き継ぐ社会だから、我々自身が汗をかいて、つくっていききたい

石田まさひろ

前日本看護連盟幹事長・N8「アンフィニ」編集長



「下ばかり向いているわけにいきません。前を見ているか」と

石田 今日仙台市内からこちらに参りました。石巻バイパス沿いは大分復旧したな、日常生活が戻ってるのかな、と思いました。ところが、女川に入った瞬間、言葉をなくしました。

須田 ええ。建物の解体は概ね終わっ

「子どもたちが引き継ぐべき価値のある町を作れなきや、意味がない」と

石田 須田さんは、昨年11月に女川町長にご就任されました。それまでは宮城県の県議会議員をされていた。それが、この一番たいへんな時期に、なぜ女川町長になろうと？

須田 はい。震災が起こったときは、

ているんですが、町中に何も残っていませんから…。

石田 東京にいたのと、目の前に毎日見ているのでは、やっぱり違いますよね。

須田 怖いものです。毎日眺めていると、だんだん慣れて、その光景が当たり前のように見えてくる…。もちろん、何が起きたかは、わかってはいるんです。だって、我々は、毎日そこにいるわけですから。でも、頭ではわかっていても、現実感がなくなっていく…。

県議で、自民党宮城県連盟の幹事長を務めていました。看護連盟さんには、震災の直後から、物資支援、人的支援をはじめ、本当に種々お助けいただきました。女川だけではなく、被災地に対して本当に力強いご支援をいただきました。先ずは、改めて御礼を申し上げます。それで…、震災後の当初は、県議という立場で、あるいは自民党県連という組織として何ができるのかを、いろいろ考えていました。避難所に行つて「大変ですね」と声をかけても

石田 もう1年経ったのに、まだまだなんだ…、と思いました。改めて、これからなんだと…。

須田 そうですね。これから大きく踏み出していく。その前提条件を作っています。今は、下ばかり向いているわけにいきません。前を見ているか…。

石田 そうですね。やっぱり生きていく方々の未来が大切だし、その人たちのために、いろいろなメッセージを出していきたいです。

「大変だと思ふなら、お前たち、何とかしろ」ってことです。被災者を激励することも役割の一つかもしれない。が、本来、我々のできる「何とか」とは、ルールを作ったり、変えたり、あるいは自分のネットワークの中でサポートしていただく皆さんをつなぐことだと、そう思い、ずっと続けてきました。当時の安住女川町長も、素晴らしいリーダーシップを発揮されていた。そして、これから復興へと向かいます。20年後…、私たちの世代は還暦になり、社会全体で一番の責任を負う立場になっています。その社会とは、これから我々が関わり、携わってつくっていく社会です。であるならば、今ゼロから始まるうとするときに、我々こそが先頭に立っていくべきではないか、と思つたんです。

石田 20年後を考えている、と。

須田 20年後の社会で一番汗をかいて頑張っているのは、今の子どもたちです。そして、その子どもたちの親世代は、私たちです。だから、我々自身が一生懸命汗をかいている姿を子どもたちに見せなくてはならない。子どもたちに委ねるべき社会は、やはり我々が責任をもつてつくっていききたいんです。一方で、私は県政の場で仕事をしていましたから、当然ながら被災地は女川だけじゃないし、女川を含めた被災地をどういう風にサポートし、また立ち直りを図るかが私の仕事だ、という思

いもありました。そうこう考えているとき「自分の生まれ育ち住んでる町すら、どうにもできないで、宮城県全体や、まして日本のことを救えるのか。まずは足元からじゃないか」というお声をいただいた。やっぱりそうかな、と。

石田 今年1月の自民党定期大会でのご講演を聞きました。その時の、ヒマラヤ杉のお話なども、子どもたちへの眼差しだった。今のお話をうかがって、やっぱり、先を見ていらっしやいますね。

須田 この復興のゴールって何だろうと考えたとき、もちろん、いろいろあ



女川第一小学校の校庭に立つヒマラヤスギ

大震災のときでも倒れなかった、校木のヒマラヤスギ。2011年8月東京新聞で、このヒマラヤスギにまつわるエピソードが紹介されていた。

震災後の最初の朝礼で、校長は、なぜヒマラヤスギが倒れなかったかを見守る子供たちに問いかけた。母と姉、祖母の行方がまだ分からなかった五年生の娘は「何千人もの卒業生や多くの人たちに優しく、温かいまなざしで見つめられてきたから、負けなかったんだと思います」と答え、校長は言葉をなくしたという。このエピソードを、須田町長は、2012年1月22日に開催された自民党大会のゲストスピーチで披露した。



るのですが、一番は我々の子どもたちのためだと思っんです。この復興を通じて、子どもたちが引き継ぐべき価値のある町を作れなきゃ、意味ないですよ。なんだ、逃げてばかりでさっぱりだめだったね、と言われるようでは、子どもたちが背負う訳ないですよ。我々自身が泥まみれでやっている姿を見せないと…。

医療と教育が中心になる新しい町づくり

石田 子どもたちに、どういう町の姿を見せたいのか、教えてください。

須田 我が町は7割以上の建物がなくなりまして。我が町だけに限って言うと、新都市を建設するのほとんど同じです。であるならば、やるべきことは家、建ちました「工場、できました」「みんな、経済活動やっています」という姿ではないはず。東北では、高齢化や過疎化、あるいは一次産業の苦戦など、いろんな問題があります。それらに対する答えを導き出せるような町づくりをしなければならぬ。安全で暮らしやすい居住地となると当然高台に造成となり、下は商業街区という姿になる。私が町長になってから、そういう開発を決めました。ちょうど病院が、現在の地域医療センターの場所が、町のヘソなんです。ここから半径

1.5キロに町の中心部が全部収まるんです。

石田 病院が中心に？

須田 そうです。ここに防災や教育など、町の機能を集約させます。人の活動動線はここに集約して、ここから活力を生み出していく。居住地は周辺に点在する形にはなりますが、コンパクトシティとしての都市機能はここでやるんだ、と。

石田 病院と教育を拠点に置くのは、やっぱり意味がありますか？

須田 はい。老若男女、あらゆる階層の方々の生活動線が集約されていくというのは、町が活性化するために重要だと思っんです。

石田 今から20年後というのと、2032年です。日本全体が高齢化のピークを迎えています。その時に、病気と障害とを持って生活している人が多くいるだろうから、各地で病院を拠点にした町づくりをしないとイケないのでは、と僕は思っていました。今のお話を聞くまで、教育は、そんなに考えていませんでしたが、確かにそうですね。次の世代に繋げていくために、病院と教育と一緒に拠点にするというのは、なるほどと思っんです。子供たちが、お年寄りの姿を身近で目にすることは大事だし、未来に繋がるなと思っんです。

須田 実際にどういう色をつけていくのかは、これから議論していきますが、

原発の雇用、水産業従事者、そして観光です。

地域の 実情にあった医療の提供を 各地域にナースステーションを

須田 医療の面では、開業医さんもいました。前回、全部だめになりました。その前から、医療機能をどうするか町の課題でした。5億円くらい持ち出しになっていた。それで、前町長のときに、100床あった町立病院を19床の診療所にして、老健を拡充するというプランができました。その形で地域医療センターがスタートしました。地域医療振興協会が指定管理者になっていて、もともと在宅診療、訪問診療を積極的にやっていたという構想があったんです。今後は、地域の実情にあった医療の提供を行い、また石巻赤十字などの拠点病院との連携をさらに進めなければいけないと思っっています。

石田 そうすると、病床規模は19床と縮小しましたが、逆に病院を中心としたようなイメージじゃなくて、もった地域に、例えば在宅ケア、在宅医療を…？

須田 そうですね、医療だけではなく、わが町の基盤再生事業として、ここからだとくらしを支える事業を

していますが、そこに地域医療センターも入っています。やはり医療と福祉が一体となって、安心を提供し、あるいは見守りの態勢を提供していく形にしていきたいですね。

石田 以前、こちらの地域保健包括支援センターの保健師、三浦さんをNPO「アンフィニ」で紹介させていただきました。震災のあと、少ない人材にもかかわらず、住民の戸別訪問など素晴らしい活動をされていました。普段から健康の管理をお手伝いをするのを、今後も継続的に形にできれば嬉しいなあとと思っんです。

須田 年に2回は、仮設住宅については全戸訪問することになっていますし、それはちゃんとやり切っています。石田 日本訪問看護財団が、名取市の仮設住宅で訪問看護の支援事業を行っています。住民の健康管理や、毎日声かけを行うといった事業をやっているんですが、これが上手くいっている。1年目は日本財団からの資金援助で行いましたが、2年目は名取市も予算を出してくださって、事業を継続することができました。このように、たまに訪問するのではなく、一緒に暮らすようなイメージ、もしくは病棟のナースステーションが町の中にあるようなイメージでできたら素晴らしいなと思っんです。

基本的な構想はそういう形です。たぶん、やり切れば、東北一とまでは言いませんけれども、沿岸部で有数の住みやすい町、暮らしやすい町ができます。ほとんどを失ったというハンディを、これからはポジティブに考えていきたいと思っっています。

石田 この震災で、女川町はずいぶん人口が減りました。高齢者の比率はどうなんですか？

須田 もともと34だったのが、震災で31%に下がりました。亡くなった方のおよそ3分の2が65歳以上の方だったからです。

石田 ああ、そういうことですか。

須田 犠牲になった子どももいます。比較的少なかった方かと思っんです。また、ほぼ同数の方が住民票を離されている。さらに、遠方にいるけれど住民票は女川に置いてる方もいらっしやるので、実質の人口は6000人前後かな。

石田 そんなに！…震災の前は1万人を超えていましたよね。

須田 ただ遠方においても、やっぱり戻りたい、と言う人も少なくないです。

石田 いい町だったら、むしろ移住して来ますよね。

須田 はい、当然視野に入れてます。もともと女川は昼間人口の多い町だったんです。1万人の人口に対して昼間人口は1万3千人を超えていました。



今回の対談を行った女川町役場(仮庁舎)には、宮城県看護連盟の西村純子第二副会長(左から一人目)と只野良子宮城北東支部長が同行。女川出身の友人の安否について須田町長と情報交換しました。



女川町役場(仮庁舎)にて、須田町長と西村副会長らによる情報交換の様子。

須田 女川でも保健婦さんや介護福祉士さんを、全部とはいかないんですが、8か所の仮設団地に配置し、一応センター機能のような形をつくっています。
石田 各地域にそれぞれナースステーションができたらいいだろうな、と思うんですが…。

須田 医療の人材が限られていますし、また必ず財源が伴うことですから、そこをどうやるか…。ICTも活用しつつ、たとえばみんながiPadを持って情報共有する、5〜6年後には黙っててもそういう状況になっているでしょうから、インフラにそういうソフトを活用して、効率的な動かし方も考えていきたいですね。

我々を、地方を、現場を信じてほしい 復興があるのではない

石田 新しいまちづくりに意欲的に取り組んでらっしゃることは感じましたが、今度は国政に対する思いを伺わせてください。

須田 復興関連については、5省40事業などと言われるように道具立ては揃いましたが、使い勝手がよいかどうかは、これからですね…。被災地の事情は当然ながら、ばらばらです。時に、それは制度に適合しない事象だから認



石田まさひろ (いしだ まさひろ)
昭和42年生まれ、奈良県大和郡山市出身。平成2年東京大学医学部保健学科卒業。平成2年看護師免許、平成6年保健士免許。平成2年聖路加国際病院勤務。以後、東京武蔵野病院勤務、衆議院公設議員秘書などを経て日本看護協会普及開発部調査研究室勤務。平成14年日本看護協会政策企画室室長から、日本看護連盟常任幹事に就任。平成17年日本看護連盟幹事に就任(平成24年退任)。その他、大学の非常勤講師などを務める。「誰でもできる精神科リハビリテーション」(共著、星和書店)、「診療報酬 その仕組みと看護の評価」(共著、日本看護協会出版会)、「看護職者のための政策過程入門」(共著、日本看護協会出版会)など著書多数。

められない、と言われる。「何のための制度なんですか?」と言いたくなりまして。制度のために復興があるんじゃない、復興をなすとげるために制度があるのですから。そのところを、もっと柔軟に受け止めていただきたい。「えい、やっ」でやってもらわないと、困ることがあります。担当の方々にかなり汗はかいてもらっています。それはやはり、政治がリードしなくちゃいけないのでしようが…。

石田 その感覚は、医療の場にもあり

感じていて、だからこそ、現場を回る努力を欠かしません。
須田 今回の復興の財源は、ほとんどが国費です。全国民から供出していただいているわけですから、一定程度の縛りは当然あります。たとえば1000億円かかるとすれば、赤ん坊からお年寄りまで国民1人あたり800円、2000億円なら1600円ずつ、いただくんです。予算を要求して執行していく側として、貴重なお金をいただいでやる事業だという自覚

をしつかり持たなくちゃダメです。まずは、その意識の共有から始めましょうと、言っていて回っています。そういうお金を使わせていただくからこそ、次の世代に残せるようなちゃんとした町づくりをなくちゃダメだと、ずっと申しあげているんです。だからこそ、我々、地方を信じてほしいと言いたい。
石田 やっばり、そういう覚悟があるから…。その覚悟が、未来のために、子どものためにという、しつかりした目的意識から出ているから、国に対し

て信じろと堂々とと言えるわけですね。

須田 信じてもらえるのか、どうかわかりませんが(笑)。

石田 (笑)でも、信じられるようにもしなければいけない、と思います。やはり、現場が一番よくわかっているんですから。現場の覚悟をちゃんと感じることができた人間が現場を信じる、という関係性を作っていくかなきゃいけないですね。

女川を、ともに育んでいただきたい

石田 女川というのはとても素晴らしい地名で、安倍政権の時代まで遡るんですね。前九年の役のとき、女・子どもたちを避難させた地域から流れ出てる川を女川と呼ぶようになったのが由来だとか。優しい名前前の町だなと思いました。ぜひ町のPRを。

須田 今の時点では、何もがなくなっているのを、ぜひ見に来てほしいですね。これは女川だけに限りませんが、本来にありのまま状態を、ぜひ多くの方に見ていただきたい。物見遊山でもOKです。まずは来ていただきたい。人が来てくれないと、お金も動きません。善意や気持ちだけで復興できるわけではないんですから。そこに経済活動が生まれ、産業というか生業が生まれ、それで暮らしていく家庭が生まれ

石田 やっばり「えい、やっ!」とやる以上、信じていることが大事ですよ。その信頼関係を築くというか…。

須田 今は信頼よりも前に、まずは齟齬が起きないように…。こういう状況ですからね、当然、やりながら、歩きながら考えていくことが、いっぱいあるわけです。ですから、そういう状況をぜひ理解してもらいたい。我が町では、全体の7割、4000棟くらいはなくなりました。1万人の町での4000棟と、仙台のような100万人都市の4000棟とは、全く意味が違いますね。それが、定規1本で同じように測られると、現場は大変なことになる…。

だからこそ、現場に行つて、自分の目で見て、感じる事が大切

石田 地域を信じて、現場を信じていることが大事ですが、信じられない理由は何かと思いませんか。

須田 なんです。理由を聞いてみたい。担当する方は、是非一度は、各地の代表的なところの状況を、自分で目の当たりにしていただきたいですね。

石田 そうですね。現場に来ると、心が動きます。で、また東京にいると心が止まっていく。それは、自分でも



て、初めて復興なのです。本当に、物見遊山でも観光でもいいので、ぜひお越しいただきたい。そして、これからという部分で言えば、この震災からの復興を通じて、それ以前の課題まで一緒に解決できるような、暮らしやすい、活力のある町を必ず再生するつもりでいますので、ぜひ一緒に育んでください、と申しあげたい。育てるといふのは「がんばったね」と誉めることもあれば「だめじゃないか」と叱ることもある。たまには「これで何か買いなさい」とお小遣いをくれるかもしれない(笑)。一緒に育てていくというのは、その関係性がずっと続いていくことだと思っんです。ぜひ女川を、ともに育んでいただきたいと思っんです。
石田 僕も住んでみたい町になりそうな気がしたので、ちょっと参加させてもらったら…。
須田 ぜひ、お願いします!



須田 善明 (すだ よしあき)
女川町長。
昭和47年生まれ。石巻高等学校・明治大学経営学部卒。父は、元女川町長。広告代理店勤務を経て、平成11年宮城県議会議員補欠選挙にて初当選。会派は自民党に所属し、自民党宮城県連幹事長、自民党青年局中央常任委員会副議長などを務める。平成23年11月から現職。
東日本大震災による津波で家を失い、母、妻、長男、長女と仮設住宅に居住。